

又 完了体的 汉日比较研究

许临扬 著

認知意味
論の観点から見た日本語と
中国語の完了アスペクト

国家社会科学基金项目阶段性成果（项目批准号：17CYY055）

浙江工商大学出版社
ZHEJIANG COMMERCE AND UNIVERSITY PRESS

完了体的汉日比较研究

许临扬 著



浙江工商大学出版社
ZHEJIANG GONGSHANG UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

完了体的汉日比较研究 / 许临扬著. —杭州: 浙江
工商大学出版社, 2017.12

ISBN 978-7-5178-2448-0

I. ①完… II. ①许… III. ①日语-对比研究-汉
语 IV. ①H36②H1

中国版本图书馆CIP数据核字(2017)第282940号

完了体的汉日比较研究

许临扬 著

责任编辑 罗丁瑞

封面设计 林朦朦

责任印制 包建辉

出版发行 浙江工商大学出版社

(杭州市教工路198号 邮政编码 310012)

(E-mail: zjgsupress@163.com)

电话: 0571-88904980, 88831806 (传真)

排 版 杭州兴邦电子印务有限公司

印 刷 虎彩印艺股份有限公司

开 本 880mm×1230mm 1/32

印 张 6.75

字 数 200千

版 印 次 2017年12月第1版 2017年12月第1次印刷

书 号 ISBN 978-7-5178-2448-0

定 价 32.00元

版权所有 翻印必究 印装差错 负责调换

浙江工商大学出版社营销部邮购电话 0571-88904970

序

許臨揚さんは、2012年3月に東京外国語大学大学院博士前期課程にて言語学修士号を取得しました。修士論文では、複合動詞「～切る」の意味を大規模コーパスを用いて認知言語学的な意味関連の観点から記述した上で、類義語の複合動詞「～抜く」との比較、そして中国語との対照を行いました。その成果は、日本認知言語学会で2回にわたり、研究発表をし、それぞれ『日本認知言語学会論文集』第12巻（2012年6月）と『日本認知言語学会論文集』第13巻（2013年6月）に掲載されました。

その後、許さん2012年4月より名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程に入学しました。修士論文で扱った「～切る」と更に進展させ、完了を表す類義語「～切る」「～抜く」「～通す」と中国語との対照としてまとめました。その成果は2013年12月、日本国立国語研究所で行われた国際シンポジウム「日本語およびアジア諸言語における複合動詞・複雑動詞の謎」で発表しました。この発表の際には、オーディエンスからさまざまな質問や提案があり、活発な意見交換ができました。さらに、2014年6月に、博士論文で扱われている日本語の補助動詞「～ておく」を第15回の日本認知言語学会で発表しました。こうした活発な学術活動の結実として、2014年10月に博士論文を提出しました。

博士論文の審査は、2014年12月26日に行われました。主査として、名古屋大学教授である私（玉岡賀津雄）、同大学教授で認知言語学分野で活躍されている堀江薫先生、やはり認知言語学分野で活躍されている同大学准教授の鷺見幸美先生、認知言語学の理論を実験手法で証明する研究を国際的な英語の学術誌に掲載している沖縄国際大学講師の里麻奈美先生の4名で評価しました。許さんの博士論文は博士の学位論文として学術的に高いレベルであると全員一致で判断し、合格となりました。そして、2015年2月18日に開催された名

古屋大学大学院国際言語文化研究科の教授会にて、博士論文の授与が正式に承認されました。その後、2016年9月から中国の蘇州科技大学の講師として採用されました。さらに、2017年には、中国国家自然科学基金項目に採択されました。

本書は、博士論文に若干の修正・加筆を加えたものです。本著では、認知言語学的な観点から日本語のアスペクト形式について議論しています。現代日本語のアスペクト研究では、鈴木（1957）をはじめ、奥田（1977）、工藤（1995）などは、「完成相」を表す「スル」（シタ）と「継続相」を表す「シテイル」（シテイタ）の対立を、日本語の形態論的なカテゴリーのアスペクトとして規定しています。そして、「※てしまう」のようなテ形補助動詞や、「～切る」のような複合動詞などを機能・意味のカテゴリーとしてのアスペクチュアリティーの中で扱っています。一方、寺村（1984）は日本語のアスペクトを一次のアスペクト、二次のアスペクト、三次のアスペクトに分けています。そして、「する」は「未然」を表し、「した」は「已然」を表し、一次のアスペクトとして両者を対立させています。そして、奥田（1977）や工藤（1995）などが排除した「※てしまう」のようなテ形補助動詞を、「※ている」と同列に扱い、文法形式化した二次のアスペクトと規定しました。さらに、「～切る」のような複合動詞を三次のアスペクトとしました。以上のように、「出来事の時間的展開性（内的時間）の把握の仕方の相違」（工藤 1995:8）を表すアスペクトについては、基本的な規定から体系的な捉え方まで意見が分かれています。

許さんは、寺村（1984）の形態論による一次的、二次的、三次のアスペクトの分類について検討した上で、中国語との対照研究を行いました。まず、二次のアスペクト形式「※ておく」「※てある」「※てしまう」が表す「完了」の意味について考察しました。そして、二次のアスペクトが表す「完了」は、ズームアウトし、全体を捉え、隣接する時空間も視野に入れるという特徴を持つことを明らかにしました。次に、三次のアスペクト形式である「～切る」「～抜く」「～通す」が表す「完了」の意味特徴を考察することによって、三次的

アスペクトが表す「完了」は、ズームインし、最終的な境界線に焦点を当てる特徴を持つことを示しました。そして、「継続」の概念に対立し、一次的アスペクト形式である「る」形が表す「完了」、すなわち、出来事をひとまとまりに捉えるという意味特徴を持つ「る」形は、二次的アスペクト、そして三次的アスペクトが表す「完了」と異なることも検討しました。最後に、二次的アスペクトの「※ておく」「※てしまう」「※である」、そして三次的アスペクトの「～切る」「～抜く」「～通す」と中国語との対照を行い、両言語の相違点と共通点を考察しました。

本書は、認知言語学的な観点から日本語の「完了」アスペクト形式を総括的に検討した点で意義があります。そして、中国語は「結果の在り方」に注目するという特徴があり、中国語も日本語と同様に、階層的な捉え方でアスペクトを総括的に捉えられるという提案も、画期的です。この度、博士論文を出版することになり、これを1つの区切りとして、教育および研究において、中国や日本ばかりでなく、世界を舞台に活躍する研究者となることを強く願っております。

名古屋大学大学院人文学研究科教授

玉岡賀津雄

名古屋大学にて、2017年6月記

目 次

第1章 序 論	1
1.1 はじめに	2
1.2 本書の構成と内容の概略	6
第2章 先行研究と問題点	11
2.1 先行研究	12
2.2 問題点	53
第3章 ズームアウトし、全体に焦点を当てる「完了」	57
3.1 「一ている」——一次的アスペクトと二次的アスペクトの 接点	60
3.2 二次的アスペクトが表す「完了」——隣接する時空間を視 野に入れる	68
3.3 まとめ	96
第4章 ズームインし、最終部分の境界線に焦点を当てる「完了」	99
4.1 「～切る」の意味分析——「変化スケール」に注目する ...	101
4.2 「～抜く」の意味分析——「動作の段階的な実現」に注目す る.....	119
4.3 三次的アスペクトが表す「完了」——完了時点に至るま でのプロセス	131
4.4 まとめ	137
第5章 日本語と中国語のアスペクトの対照——「完了」をめぐる	139
5.1 二次的アスペクト「一ておく」「一てある」「一てしまう」	

の日中対照	141
5.2 三次的アスペクト「～切る」「～抜く」「～通す」の日中 対照	153
5.3 日本語と中国語のアスペクトの対照—「完了」をめぐ って	162
第6章 結語と今後の課題	169
参考文献	174
付 録	188
索 引	210
后 記	213

第1章 序 論

1.1 はじめに

アスペクトは元々ロシア語を含むスラブ諸語にある概念であり、一つの動詞は「完了体」と「不完了体」のペアとなる形態的な対立を持ち、テンスとは別に、形態論的なカテゴリーの一つを成す。しかし、日本語を含むスラブ諸語以外の言語においては、スラブ諸語と同様な形態論的なアスペクトのカテゴリーが見られないため、スラブ諸語にあるアスペクトの概念を「aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation」(Comrie 1976:3)というふうに一般化され、個別言語ごとにその表し方を考察されている。

本書は、「完了」の意味特徴をめぐって、認知言語学及び対照言語学の観点から日本語のアスペクト形式を研究するものである。寺村(1984)は現代日本語のアスペクトを「する」と「した」の対立を成す一次的アスペクト、テ形に接続する補助動詞の二次的アスペクト、そして、動詞連用形+動詞の三次的アスペクトに分けている。本書は、寺村(1984)のこの分類に従い、その中から二次的アスペクト形式「一ておく」^①「一てある」「一てしまう」、そして、三次的アスペクト形式「～切る」「～抜く」「～通す」を取り上げ、次の3点を明らかにすることを目的とする。

第1に、これらの形式はそれぞれどのような「完了」の意味を表すかを明らかにした上で、一次的、二次的、三次的アスペクト形式それぞれが表す「完了」の意味にどのような特徴が見られるかを考

① 本書は、基本的に寺村(1984)の分類に従うが、「一ておく」について、寺村(1984)は理由を提示していないが、「一ておく」の形式をアスペクトの観点から扱っていない。一方、本書の第3章で分析しているように、認知言語学的な観点から、「一ておく」は「隣接する時空間を視野に入れる二次的アスペクト」という点でほかの形式と一緒に分析することによって、その意味・用法が正しく把握できる。従って、本書では「一ておく」を「一てある」や「一てしまう」と同様に、二次的アスペクト形式として扱う。

察する。

第2に、寺村(1984)が打ち出した日本語のアスペクトに関する体系的な分類の意義を認知言語学的な観点から再検討することを通して、奥田(1977)、工藤(1995)などによって形態論的に規定されている現代日本語のアスペクトの対立「する」と「一ている」は、ほかのアスペクト形式との関係を、どのように統一的に捉えられるかを考察する。

第3に、二次的アスペクトの「一ておく」「一てある」「一てしまう」、そして、三次的アスペクトの「～切る」「～抜く」「～通す」について中国語との対照を行い、日中両言語の相違点と共通点を考察する。

現代日本語のアスペクト研究に関しては、鈴木(1957)をはじめ、奥田(1977)、工藤(1995)などは「完成相」を表す「スル」(シタ)と「継続相」を表す「シテイル」(シテイタ)の対立を日本語の形態論的なカテゴリーのアスペクトとして規定し、「一てしまう」のようなテ形補助動詞や、「～切る」のような複合動詞などを機能・意味的カテゴリーとしてアスペクチュアリティの中で扱っている。このような立場とは異なり、寺村(1984)は現代日本語のアスペクトを一次的アスペクト、二次的アスペクト、三次的アスペクトに分け、「する」を「未然」を表す形とし、「した」を「已然」を表す形とし、一次的アスペクトとして両者を対立させている。そして、奥田(1977)や工藤(1995)などが排除した「一てしまう」のようなテ形補助動詞を「一ている」と同列に扱い、文法形式化した二次的アスペクトと規定し、更に「～切る」のような複合動詞を三次的アスペクトとしている。

このように、「完了」か「継続」かの対立を中心とする「出来事の時間的展開性(内的時間)の把握の仕方の相違」(工藤1995:8)を表すアスペクトについて、現代日本語において、基本的な規定から体系的な捉え方まで意見が分かれていることが伺える。その原因が「完了」(または「継続」)の意味をどのように捉えるかにあると考え、先行研究に言及されている「完了」の意味の捉え方を(1)の3タイ

ブにまとめる。

(1) ①過程をもつ出来事の内部構造に注目すると、「起点」「途中」「終点」の3つの局面を認めることができる。この「終点」の完了概念を指す。日本語学では「完結相」と呼ばれているものにあたり、「～終わる」や「～切る」や「～てしまう」などがこのタイプに属する。

② “perfective”の完了概念を指す。一般的に「完了相」(perfective)と呼ばれているものである。Comrie (1976) は “perfective” を次のように説明している。「the whole of the situation is presented as a single unanalyzable whole, with beginning, middle, and end rolled into one; no attempt is made to divide this situation up into the various individual phases」(p. 3)。

③ パーフェクト (perfect) の完了概念を指す。パーフェクトとは「the continuing relevance of a previous situation」(Comrie 1976:57) であり、結果パーフェクト、経験パーフェクトなどが含まれている。

このように、一口に「完了」と言っても、視点が異なれば「完了」の意味の捉え方も変わってくる。そのため、日本語のように、個別言語のアスペクトの体系を構築するのに混乱を招きかねない。それでは、次に、認知言語学的な観点からどのように「完了」が定義されるかを見てみる。認知言語学ではアスペクトを次のように捉えている。「動詞に関する完結 (perfective) / 非完結 (imperfective) という区別が名詞に関する加算 / 不加算の区別と類比的であり、事物を有界 / 非有界的に捉える話者の認知能力にその基盤が求められる……モノの有界 / 非有界的把握を示す文法範疇が数だとしたら、コトの有界 / 非有界的把握を示す文法範疇がアスペクトだと言える。」(野村 2007:6-7)。そして、出来事全体をまるごと見るのか、

中に入って見るのかという「視点」について、ピンカー (2009) ^① は次のように述べている。「ズームイン、ズームアウトすることで境界が曖昧な場合を含め、出来事全体を一つの塊に圧縮することができる。ズームインは『未完成相』(imperfective) と呼ばれ、……ズームアウトは『完成相』(perfective) と呼ばれ、……」(p. 95)。

本書は、上記の先行研究を踏まえ、認知言語学的な観点から「完了」の意味を (2) のように規定する。

- (2) 出来事を見る視点によって、ズームアウトし、出来事を全体として捉える。または、ズームインし、出来事の時間的内部構造に入り込み、終結部分の「境界線」に注目する。

その上で、寺村 (1984) の分類を (3) のように捉え直し、本項の冒頭で挙げている本書の研究対象をその中に位置づけ、考察していく ^②。

- (3) A. ズームアウトし、全体に焦点を当てる「完了」

- ①ズームアウトし、全体を捉える一次的アスペクト形式：
「する」

① ピンカーはノーム・チョムスキーの生成文法の影響を受けた心理学者だが、近著ピンカー (2009) では認知よりの分析を展開しており、アスペクトを出来事の〈形〉と〈視点〉を時間と関係づける文法としている。

② 上記で紹介しているように、現代日本語のアスペクト研究に関しては、鈴木 (1957) をはじめ、奥田 (1977)、工藤 (1995) などは「完成相」を表す「スル」(シタ) と「継続相」を表す「シテイル」(シテイタ) の対立を形態論的なカテゴリーのアスペクトとして規定している。工藤 (1995) などによると、「一ている」は主に「走っている」のような「進行相」と「死んでいる」のような「結果相」に分けている。本書は「一ている」を研究対象として扱わないが、次の2つの理由において、「一ている」の主要用法と本書が考えている (3) の体系との関係を「ズームアウトし、全体に焦点を当てる完了」(本書の第三章) の中で触れておく。第1に、本書は基本的に寺村 (1984) の一次的、二次的、三次的アスペクトの分類に従う。しかし、(1) の②で示した“perfective”と“imperfective”の対立は寺村 (1984) が主張している「する」と「した」の対立ではなく、工藤 (1995) などが主張している「する」と「一ている」の対立だと考える。第2に、「結果相」の用法について、「一ている」と「一である」が相補的關係にあるため、本書が考えている (3) のAの②に位置づけることができる。

- ②ズームアウトし、全体を捉え、更に隣接する時空間も視野に入れる二次的アスペクト形式:「ている」(「結果状態」の用法)、「一ておく」「一てしまう」「一てある」

B. ズームインし、最終部分の境界線に焦点を当てる「完了」

- ③三次的アスペクト形式:「～切る」「～抜く」「～通す」

このように、寺村(1984)の形態論によって、一次的、二次的、三次的アスペクトが表す「完了」の意味特徴が明らかになり、その分類の意義を認知言語学的な観点から与えることができる一方、なぜ日本語には一次的アスペクト形式があり、そして、二次的アスペクト形式もあり、更に、三次的アスペクト形式まであるのかという問いに対する答えを見出すことができる。また、寺村(1984)と異なる立場に立っている工藤(1995)などが主張している「する」(完成相)と「している」(継続相)の対立は、ほかのアスペクト形式との矛盾を解消し、「する」「一ている」とほかのアスペクト形式との関係を統一的に説明することができる。更に、(3)のような捉え方が日本語特有なものなのかどうかを中国語との対照を通して検討することによって、現代日本語のアスペクトの特徴をより明確に浮かび上がらせる。また、他言語との共通点を見出すことによって、アスペクトの通言語的な普遍性に示唆を与えることもできる。

1.2 本書の構成と内容の概略

本書は全部で6章に分けている。

第1章では、本書の全体像を提示する。まず、現代日本語のアスペクト研究を概観し、先行研究で言及している様々な「完了」の意味をまとめた上で、本書における「完了」の意味を認知言語学的な観点から定義する。次に、寺村(1984)の形態論の観点から分類した一次的、二次的、三次的アスペクトを本書が定義した「完了」の意味に基づき、体系的に捉え直す。そして、本書の研究対象となる6つの形式、すわなち、補助動詞の「一ておく」「一てある」「一て

しまう」及び複合動詞の「～切る」「～抜く」「～通す」をその体系の中に位置づける。最後に、このような階層的なアスペクト体系を持つ日本語と言語の系統が異なる中国語との対照を目的として述べる。

第2章は、まず、研究対象となる二次的アスペクトの「一ておく」「一てある」「一てしまう」、そして三次的アスペクトの「～切る」「～抜く」「～通す」の先行研究の中で代表的なものを取り上げ、概観する。次に、本書の研究目的から見ると、研究対象となる6つの形式にどのような問題点があるのかを提起し、研究方法を述べる。

第3章は、まず先行研究で論じられている「一ている」の用法を中心に、出来事の部分に焦点をあて、「進行」を表す「一ている」がひとまとまり性を持ち、「完了」を表す「する」との対立が見られる。一方、「結果状態」を表す「一ている」は、「完了」をベースにした「結果状態」を表す二次的アスペクト形式「一てある」と緊密な関係があり、「過去に実現したことの結果として現在の状態を述べる」(寺村 1984:147)との意味から、「一ている」には二次的アスペクトの特徴も見られる^①。二次的アスペクトの「一てある」は「結果状態」の意味において「一ている」と相補的關係があるが、ムード的な意味「準備」において、「一ておく」との類似性が見られている。しかし、先行研究では、「一ておく」という形式について、「持続」というアスペクトの意味があるか否か、そして、アスペクトの意味とムード的な意味「準備」とどのような関係があるかをめぐって、長い論争が続いてきた。本書はそれを踏まえ、3.2.1節で「一ておく」の意味分析を行い、区切られた時空間を占めるという事態把握において、「持続」と「準備」の意味は対立するものではなく、一方が他方の付随的な、語用論的な意味でもなく、1つの事態把握の2つの側面であることを明らかにした。そして、「一ておく」の意味分析を踏まえ、

① 本書は「一ている」を研究するものではないため、「一ている」の意味をどのように統一的に捉えるのか、また、「動作の進行」と「結果状態」を「継続相」に統一する考え方が合理的かどうかなどについては深く入っていない。

「一てある」の意味との比較を行い、「一てある」と「一ておく」は前接動詞の出来事をまるごと捉え、更に隣接する時空間を視野に入れる点が共通しているが、区切られた時空間の関わり方の違いが原因として、両者が表す「準備」の意味が異なる。このように、二次的アスペクトの「一てある」と「一ておく」は、先行研究では直接「完了」形式として扱われていないが、ズームアウトし、全体に焦点を当てる「完了」という点において、一次的アスペクトの「する」と共通している。一方、「一てある」と「一ておく」はズームアウトし、全体を捉えた上で、更に隣接する時空間を視野に入れる点が一次的アスペクトの「する」と異なるため、アスペクト的に「完了」を表すとともに、「準備」などのようなムード的な意味を伴う違いが見られる。

一方、テ形に接続する補助動詞の中で「完了」を表すと言われている「一てしまう」がある。「一てしまう」がどのような「完了」の意味を表すのか、一次的アスペクトの「する」が表す「完了」とどのように異なるのか、また、「一ておく」と「一てある」とどのように統一的に捉えられるのかをめぐって、3.2.3節で「一てしまう」の意味を考察する。

第4章では、先行研究で「完了」を表す形式として扱われている複合動詞の「～切る」「～抜く」「～通す」は、どのような「完了」の意味を表すのかという点を絞って、意味分析と意味比較を行う。まず、4.1節で「～切る」の意味分析を行う。「モノの切断」という基本的な意味を持つ「～切る」は「動作の完遂」というアスペクトの意味への変容は、一足飛びに起こるのではなく、その中間に変化動詞と結合する「～切る」の用法が存在する。変化動詞と結合する「～切る」から動作動詞と結合する「～切る」への意味拡張の中で「変化スケール」が注目され、橋渡しの働きをしている。つまり、動作動詞は目的語と共起することによって獲得した動作対象の「変化スケール」に注目することによって、動作対象がゼロになった時点が、動作の完了時点となる、というのが「～切る」の表す「完了」の意

味である。次に、4.2節で「～抜く」の意味分析を行う。「～抜く」の意味分析では、「～抜く」の基本的な意味を「拔出」と「貫通」の2種類に分け、「貫通」の意味は空間での抽象化を起こし、「目標物を追い抜く動き」の意味に変容する。そして、更に時間にも拡張し、「目標実現の追求」というアスペクトの意味と結びつく。「目標実現の追求」とは目標に向かい、時間の流れの中で、段階的な動作の実現という意味であり、これが「～抜く」が表す「完了」の意味特徴と考える。最後に、4.3節で「～切る」「～抜く」「～通す」の意味比較を行う。三者の意味比較を行う前に、「～通す」が表す「完了」の意味特徴を検討する。「～通す」は「～切る」「～抜く」と異なり、始点から完了時点までの動作の過程そのものに注目する特徴を持っていることを明らかにする。このように、「～切る」「～抜く」「～通す」は「完了」という意味においては同様なのに、完了時点に至るまでのプロセスにおける焦点の当て方によって、「～切る」「～抜く」「～通す」が表す「完了」の意味合いに違いが出てくる。そして、「完了時点に至るまでのプロセスの違い」という特徴がズームインし、最終部分の境界線に焦点を当てる「完了」であり、「ズームアウトし、出来事を全体として捉える」一次的、二次的「完了」アスペクト形式との違いも明らかになる。

第5章では、第3章と第4章で考察してきた二次的アスペクトの「一ておく」「一てある」「一てしまう」、そして三次的アスペクトの「～切る」「～抜く」「～通す」について、中国語との対照を行い、「完了」を表すアスペクト形式に関する両言語の相違点を考察する。そして、両言語に見られる共通点も検討し、認知言語学の意味の観点から中国語のアスペクト体系を見直す可能性を探る。まず、5.1節で二次的アスペクト形式「一ておく」「一てある」「一てしまう」と中国語との対照を行う。対照を通して、日本語の二次的アスペクトが表す「完了」、すなわち、ズームアウトし、全体を捉え、更に隣接する時空間を視野に入れるという特徴を持つ「完了」の捉え方は中国語では言語化しにくいことを明らかにする。次に、5.2節で三次的アスペク